

研究・調査報告書

報告書番号	担当
269	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
The combined effect of smoking tobacco and drinking alcohol on cause-specific mortality: a 30 year cohort study. タバコとアルコール併用の死因別死亡率への影響：30年間のコホートスタディ	
執筆者	
Hart CL, Davey Smith G, Gruer L, Watt GC.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
BMC Public Health. 2010 Dec 24;10:789.	
キーワード	
喫煙、飲酒 併用、死因死亡	
要旨	
目的： 喫煙と飲酒はいずれも死亡リスクの上昇に関連している。これらの併用が死因別死亡率に及ぼす影響を前向きコホートスタディで調べた。	
方法： 本研究の参加者は、1970年から1973年にスコットランドの様々な職域から集められた35-64歳の男性5,771人であり、質問票調査と身体検査、血液検査をおこなった。死因は総死亡のほか、冠動脈疾患(CHD)、脳卒中、アルコール関連、呼吸器と喫煙関連の癌を分析した。参加者は、喫煙状況(非喫煙、過去喫煙、現在喫煙)、1週間あたりの飲酒量(なし、1-14ユニット、15ユニット以上)で9つのグループに分けた。Cox比例ハザードモデルで年齢と他のリスクファクターを調整したハザード比を算出した。	
結果： 30年間の追跡期間中3,083人(53.4%)が死亡した。非喫煙非飲酒者に比べて、喫煙かつ週15ユニット以上飲酒者の総死亡は最も高く、ハザード比は2.71(95%信頼区間2.31-3.19)だった。CHD死亡のハザード比は、非喫煙者に比べて現在喫煙者で高かった。喫煙は呼吸器疾患の死亡率に影響したが、アルコールはほとんど影響しなかった。さまざまな交絡因子で調整するとハザード比は小さくなったが、アルコールと喫煙の影響は残った。若年死亡率は、特に週15ユニット以上飲酒の喫煙者で高く、男性の1/4が65歳までに死亡した。	
結論： 喫煙と週15ユニット以上の飲酒は全ての死因における最も危険な習慣である。	